特集
「場」を求めて

10月下旬、読み聞かせの活動を行うサークル「有明文庫」が遊びに来てくれた。あそばせ隊の活動を行う中で、横のつながりも増え、心強さも増した。

子ども同士のけんかは自分たちで解決させ、遊びも自分たちで工夫させる。

発足したころは、どう遊んで良いか分からない子もいたが、子どもが自ら遊びを創り出すのには、そう時間は掛からなかった。

「すぐに、追っかけっこが始まり、探検ごっこも始まりました。昔も今も、遊び場があれば、自分たちで工夫して遊ぶということが、よく分かりました」と安達さん。

子どもたちの遊びは、目に見えるような育ちの成果を求めるものではない。しかし、仲間と過ごす自由な場は、自然な思いやりや遊びの創造力をはぐくんでいるようだ。

「無理なく楽しく」と抱負を話す安達さん。

そして、親同士の交流も進んだ。年齢の高い子どもを持つ母親から情報を得ることができたり、子どもの共通する悩みを話したり、忙しいときには面倒を見合ったりするなど、1分1秒子どもと向き合っている親同士がともに支え合うことができた。

「ひとりのためであっても、ふたりのためであっても、親と子どもが、ここが良い場だと言ってくれるなら、やってきて良かったと思いました。子どもにとっても、よその親にかわいがってもらえることは宝だと思います」。

ゆるい雰囲気だから続いた

昨年、市の「わいわいランド」がスタートしても、遊ばせ隊の活動が終わることはなかった。

「少人数の気軽さや自由さがある『あそばせ隊』、大人数でも安心して楽しめる『わいわいランド』。子どもたちの遊び場の選択肢も広がりました。それにボランティアパトロールの活動もあって、最近は本当に安心して遊べる気がします」。

遊ばせ隊に出席の義務はなく、いつでも来られて、いつでも帰れる。発足して5年、これまで子どもたちに開放感を提供できたこと、そして、活動を続けられたのは、この「ゆるさ」のおかげだと安達さんは振り返る。

「集まる人が気を使わない関係になって、お互い負担を軽減し合えるようになりました。長く続けるには、自分がしんどくならないこと、無理をしないことも大切かな」。

気負わず、大上段に構えないその姿勢は、子どもたちの笑顔となって表れている。

Interview
インタビューその2

市民活動の新たな拠点「くるりん広場」

市民活動の新たな拠点として昨年10月にオープンした「くるりん広場」。34の市民団体、6個人が登録する「わの会」が、市とパートナーシップ協定を結び管理運営を行っています。オープンして1年余り。手応えはどうでしょうか。わの会会長の今泉さんと事務局長の磯野さんに話を聞きました。

わの会会長
今泉（いまいずみ）　一（はじめ）さん
安曇野ブランドデザイン会議の市民活動センタープロジェクト情報部会の部会長を経て、平成20年7月、会長に就任。

――市民活動センター「くるりん広場」はどんな場ですか。

今泉　まずは市民団体の「活動の場」ですね。わの会の登録団体が会議などの活動に使っています。それと「情報発信の場」。各団体の活動情報、行政資料が閲覧できます。また、月に1回程度、「くるりん広場講座」を開いたり、隔月の情報誌「くるりんニュース」を発行したりしています。

磯野　市民の「交流の場」にもしていきたいですよね。1階と2階にあるフリースペースは20席入る会議机があって、予約なしで利用できます。わの会の登録がなくても打ち合わせなど利用でき、おすすめです。

わの会事務局長
磯野（いその）　康子（やすこ）さん
NPO法人「あづみ野風土舎」代表。団体を通じて、地域・風土に根ざした教育・環境保全・文化活動を行っている。

――市民活動センターを市民が管理するのは珍しいそうですね。

今泉　利用者である市民団体が市とパートナーシップ協定を結び管理しているのは、国内でも少ないと思います。

磯野　ユニークですよね。日直や清掃などの管理のほか、各部会に分かれての運営企画を行うなど、利用者ですがお客さまではない立場です。これがあるから面倒という考えもありますが、「貸していただきます」という感じにならないのはメリット。自分たちの物を保管できるスペースがあったり、事務所の窓口にもなったり、使い勝手も良いです。

穂高総合支所の西隣に位置する

――行政のサービスとの違いは?

今泉　行政が大きな場を提供することも大切ですが、市民がやった方が小回りの利く部分があると思います。行政との協働は、区（自治会）が大きな存在ですが、目的型の市民活動もこの場で育てばいいなと思います。

磯野　行政には公平性という縛りがあって、個性的な展開が難しいという宿命があると思います。その点、ここは自分たちがやろうと思えばできる。そういう意味で多彩な公益的活動の一面を見ることができます。

――最後に抱負を一言。

今泉　まちづくりに情熱がある人が「ここに来れば何とかなる」という場になるのが理想です。

磯野　こういう場があることを多くの人に知ってもらいたいです。気軽に足を運んでください。